



Title	＜書評＞「村長ありき」（及川和男著，新潮文庫，360円）
Author(s)	ゆうこちゃん
Citation	大阪公衆衛生. 1990, 57, p. 22-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83669
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『村長ありき』

及川和男著（新潮文庫 360円）

岩手県沢内村は、宿命の豪雪で半年近くも車馬の交通は絶え、粗衣粗食に耐える村人たちは健康を害し、病気は多発した。

このような悪条件のなか、深沢晟雄氏は生命の尊重を村政の目標とし、新生沢内村を目指し村長に就任した。

まずは、雪という自然の猛威を克服することを悲願として奔走、ついに村と県都盛岡までの冬季交通を確保し、医療行政では、高齢者、乳児に対する国保十割給付を断行、平均寿命の延長など数々の偉業をなしとげた。

特に、全国最悪であった乳児死亡率を5年で日本初めてのゼロへと導いた功績には目をみはるものがある。

深沢村長が、「村人の命を守るために私は命をかける。カネがないからできないというのは、現実逃避の誰もが口にするものだ。道のないところに道をつけるんだ。長生きしてよかったと村人が思えたときこそ、生命行政の成果があるのだ」と言って、その独創性と実行力で困難にうちかっていく姿はとても感動的で、読んでいる私まで勇気がわいてきた。

深沢氏の村を思う情熱が村人の心を動かし、村全体を変えていった。人間の力って何て素晴らしいのだろうか。そして、力を合わせれば、どんな大変なことでもできるということも教えられた。また、民主主義とは？自治とは？政治の原点とは何か？についても多くのことを物語っている。

最後に、命の尊さを訴え、自分の信念である生命行政を貫いた深沢氏の生きざまに心から尊敬の拍手を送るとともに、この本を自分の人生の道しるべの一冊としていきたいと思う。
(ゆうこちゃん)